

野に仏・里に仏

大谷 眞

第六回目の旅・その一
一夜の宿から学ぶこと

1994年11月6日
雨のち曇り

昨夜、大阪南港から別府・松山行き関西フェリーに乗る。午前4時過ぎ起床。外はぱらぱらと雨。5時過ぎ部屋を出て、下船口に向かった。松山港接岸後、合図を待つて船を降りた。

今回は前回の夜行バスに懲りて、松山までフェリーを使った。松山からは前回の終了地点「宇和」まで、路線バスを乗り継いで戻る。

前回と同じ待合室を借り、お遍路の衣装をいったん取り出したものの、またしまい直し、トレーナーで歩きだした。前回、最終日に会った、定年の男性へんろに見習い、動きやすさを考えたのだ。雨は上がっていた。少し蒸し暑い、風が少し

あつて、ちょうどよい心持ちだ。足は快調。

10キロほど歩くと、山に向けて遍路道への分岐に来た。鳥坂峠は車道より1キロほど距離がかさみ、1時間ほど余分に時間もかかるが、自然味豊か、と遍路地図には記載がある。迷わず山手へ足を向ける。集落を抜け、「昔の関所跡」と看板がある辺りから、本格的な山道となった。

踏み込んで、しまった、と思った。草が野放図に生い茂り、昨夜の雨でぬかるんでいる。草の種と雨の露とぬかるみの泥とで、すぐにズボンはどうどろになった。おまけに靴にまで水がしみてきた。登るにしたがって汗も吹き出してくる。トレーナーを脱いでTシャツ一枚になっても充分暑い。草が道を隠し、日当たり

の悪い場所はやはりママシのことが頭をかすめる。しかたなく「般若心経」を唱えながら恐る恐る歩いた。

1時間ほどで山道は抜け、後は旧国道をひたすら歩いた。途中から足の具合が悪くなり、適当な所を見つけて靴を脱いでみた。案の定、まめ防止用のテープがはがれ、よじれていた。右足の人差し指の先に既にまめができていた。いつもと同じ所だ。足を濡らしたのが良くなかったのだらう。

テープを張り直して出発する。大師堂が朽ちかけた「札掛け大師」を過ぎ、国道に合流する手前で公衆電話を見つけ、国民宿舎「臥竜苑」に予約を入れた。

4時からの受付を待ち、通された部屋は窓からの景色が絶景。大きく蛇行した河が広々と下方に広がっている。ただ、建物そのものはかなり老築化が進んでいた。とりあえず、シャツとズボンの裾だけを洗い、食事の後は早々に床についた。

11月7日 晴れ時々曇り

4時半起床。カーテンの外はまだ真つ暗だ。霧が出て、はるか下に見える橋と、ぼつんと突つ立つ外灯が、ぼうつと夢のようににじんでいる。そつと準備を済ませ、6時には出発する。

川に沿って歩くうちに、広大な河川敷の公園に出た。既に夜は明けている。道は、この先「十夜ケ橋」へと向かうはずなのに、やがて河からどんどん離れ始めた。この河にかかると気が付き始めたころ、ようやく番外霊場「十夜

ケ橋」に到着した。

納経所もあるが人影がない。国道沿いのごくありふれた小さなお寺、といった風情だ。さて、あのお大師さんが、寒さに震えて一晚を明かしたという橋の下とは、と辺りをうかがうと、斜め前の国道にかかる小さな橋がある。まさか、と橋の横手から下に降りると、かわいいお大師さんが布団をかぶって眠ておられた。左手には大きなレリーフで、同じく寝姿の像があり、右手には橋の下で夜を明かす、いかにも寒そうな

お大師さんの絵が掲げられていた。一夜の宿を提供してくれる人も無く、橋の下で夜を明かすことになったお大師さんが、あまりの寒さに、一夜が十夜のようにも感じた、との逸話が、この「十夜ケ橋」のいわれと聞いている。そういえば、いつぞや、最御岬寺への途中、雨の中を海岸で野宿したころなど、なつかしく思い出した。しかしもう随分昔のような気がする…。団体さんらしいざわざわとした声に我に返り、入れ替わり重い腰をあげた。



朝のラッシュなのか、車の連なる国道を歩きながら、さて、と考えた。地図上では、ここから次の第四十四番大宝寺までは40数キロもの道程とある。しかも遍路道は、やがて国道からそれ、久万町に抜けるための山道を、またあえぎながら越えねばなるまい。問題は今夜の宿だ。20キロ先に、歩き遍路の体験者が書かれた「さかえや旅館」もある。しかし今の時間から予測すると、あまりに早く着きすぎてしまいそうだ。

その先となると、地図上では、無料宿泊所、接待所と、いくつかの施設の記載もある。この辺りでは「十夜ヶ橋」の逸話の反省から、土地の人々が面目一新の意味で、各地に無料宿泊所を提供されていると聞いた。まあ、なるようになるさ、といったものように腹をくくり、また歩き続けることにした。やがて国道56号から別れ、379号に入った。あとはうねうねと川沿いに道は続く。

「お遍路無料接待所」「千人宿記念大師堂」「楽水大師堂」と、いくつかの

無料宿泊所を通過した。いずれもまだ日も高く、厚かましく利用させてもらうには、さすがに気が引けた。こうなれば、歩けるところまで歩いて、後はバス停かどこかを拝借するしかないだろう。

午後5時を回った頃、さすがに疲れを感じ始めた。少しずつ不安も胸をよぎる。このまま、まさか山越えはできない。食料品は通りがかりの店で少しは仕入れたものの、夜の山道はできれば避けたい。

やがてトンネルを越えたところで、左手にバス停が目についた。人家からも離れ、ここなら気になく利用できそうだ。しかし、近づいてみると、近くに住む人が通勤に使うのだろう、ぎっしりと自転車やバイクが突っ込んである。ため息をついて、ふと上を見上げると、石段の上に小さなお堂が見えた。石段を登り、格子の引き戸をするりと開けると、4帖半ほどの畳敷きの空間がある。奥には石のお大師さんがぼつりと安置されていた。少々ほこりっぽいが、部屋の

隅にはほうきもある。少し離れた所には外灯もある。既に辺りは暗くなり初めていたので、やれ、ありがたや、とここを今夜の宿と決めた。早速ほうきで中を掃き清めた。それから、お大師さんに口ウソクとお線香をあげ、感謝のお礼にお経を唱えた。いつの間にか、こんな所作も自然にできるようになっていった。お供えの餅も果物も、まだ新しい所を見ると、近くの方が定期的に管理されておられるのだろう。口ウソクに浮かんだお大師さんの顔が、まゆの上に薄くできた影のせい、まるで笑っているように見えた。

買ってきたパンで質素な夕食をすませ、人心地ついた所で、早々に寝袋にもぐりこんだ。時計ではまだ7時にもなっていない。日が沈んでから少し風が始めていた。お堂の壁二面は、半分格子の吹き抜けとなっており、室内の温度もぐんぐん下がりはじめた。

口ウソクの火はそのうち途絶えた。あとはうすらすらと、外の明かりがさしこんでいる。先程まで、



風が吹くたび炎が揺れ、そのつどひやりとさせられたのは、闇を恐れる本能のせいだろう。しかし今、明かりも途絶えたこのお堂に身を預けていると、先程の恐怖心は不思議に今は感じなかった。何かに守られている、そんな心地がした。

そうか、ここがお大師さんの家なら、ちゃんと彼が見守ってくれているはずだ……。

そう気付くと、なるほど、つまりこれが「信心」というものなのか、と今さらながら思った。目が

なれてくると、天井近く、いくつかの額がぼんやり見える。先程、ロウソクの明かりのもとで拝見した際は、古い大師堂、白木も鮮やかな新大師堂、それにこの新築を祝う人たちの姿等が掲げられていた。今のこの大師堂の木肌からすれば、それらの写真の時間から、既にかかなりの年月が経過しているはずだ。既に齢を重ねた人の姿もあった。あの方たちは、今でもお元気にさ

れているのだろうか……。と、バスの留まる音がして、数名の若い女性の

降り立つ声があった。車が走り去ると、銘々に単車のエンジンをかけ、なにやらかしましく騒いでいる。ひとしきり笑いあつた後、各々また夜の中に消えていった。こんなささいな出来事を、石のお大師様は、ここから日々眺めて来られたのだろう。風が強まり、冷え込みがさらに強まっていた。

11月8日 晴れ

4時過ぎ、目覚ましが鳴った。寒さの中、しばらく寝付かれなかったが、いつのまにか熟睡してい

たらしい。まだ眠り足りない体を、えいっと起こし、お経を上げる。ザックにとめていた温度計は6度。バス停での野宿ならかなりこたえただろう。

6時前出発。少し考えて、納札に、

「一晩お堂を拝借しました。ありがとうございます。ありがとうございました。」

と書きそえ、百円玉を重しにして、お供えの横に置いた。

お堂の前からすぐ山手へと道は分岐している。

標識に沿ってこの道を進んだ。坂道を登りながら、改めて寒さに身が凍えた。

体中、震えが止まらない。

地面を蹴り出す杖を持つ手もかじかんでくる。やがて夜も明け、集落を抜けてから、本格的に山道となった。ひわだ峠で軽く食事をして、さらに下ると久万町に出た。本日の宿を電話で確保する。

第四十四番大室寺を打ち、ここから四十五番岩屋寺までの9キロは、また山道の登りが続く。落ち葉が道にうずたかく積もり、歩きたび、かさかさとした心地よい。気温も上がり、上り坂とあって、汗が

とめどもなく吹き出して来る。

「八丁坂」と案内板のある辺りから、いよいよ本格的な登りとなった。あえぎながら登り詰めると、そのうちゆるやかなアツブダウンとなり、やがて岩屋寺の行場と思える所に出た。見上げるような大岩がポツカリと割れている。あたりには点々と石仏が安置されていた。どの道をたどれば岩屋寺に下れるのだろう、と少し不安になった所で、下方からお遍路の鈴の音が聞こえた。ほっとして音の方向に下る。

第四十五番岩屋寺は、文字通り、岩に囲まれた不思議な景観の山寺だ。本堂の下には「願い地蔵」とあって、洞窟の奥深く、何体もの石仏が祭られていた。団体でこつた返す納経所で待たされた後、これも延々と続く坂道を下った。どうやら私は裏山から岩屋寺に入ったらしい。しかしこの石段、お年寄りにはかなりきついはずなのに、ですりにすがりながら、後から後から登って来られる。なまはんかな距離ではないだ

けに、これには驚かされた。

今夜の宿「門田屋」は、参道を下り切って、小さな橋を渡ったすぐ右手にあった。玄関を入ろうとすると、すぐ前の食料品店からあわてて飛び出し、て来る人がいる。彼女が「門田屋」の女将さんらしい。

「まだ、何も用意してなくて・・・。」

と、あわててガラス戸を開けてくれた。

「こんな早く着かれるとは思わなかったので、夕飯はまだ用意してないんですよ。」

「すみません。歩いていると、時間がお約束できなくて・・・。ちょっと早いな、とは思ったんですけど。」

「うちはそれに、ホント、たいしたお食事はできませんけど、勘弁してくださいね。」

電話で予約を取った際も、そんなふうに言われていた。むろん贅沢は言うつもりは毛頭無い。

「食事はともかく、大汗をかきましたから、お風呂と洗濯だけ先に済ませたいのですけど・・・。」

「おふるはすぐ沸きますから。洗濯機は自由に使ってください。昨夜の人がいろいろ触っているかもしれないけど。」

とりあえずコタツのある部屋に荷物を運んでいる間に、彼女はおふるに火を入れてくれた。

「うちは薪のおふるだから、すぐに沸きますよ。」

女将さんはときばきと薪をくべる。薪のお風呂なんて、何年ぶりだろう。珍しくて彼女の横に突っ立って眺めていた。

「薪だと集めるのに苦労しませんか？」

「いいえ、こじゃ製材したあとの木っ端、いくらでもあるから。」

ばちばち燃える音に、木の香りがして、遠い記憶がふわふわと頭をもたげて来る。沸き上がったところでゆっくりと湯船に浸かった。ざざと、湯が溢れて浴室に湯気が立ちこめた。水で埋めても埋めても、おきがあるから湯は冷めては来ない。

風呂の後、コタツのある部屋へ行く。つい先程飛び込んで来た中年の夫婦連れは、

「すみませんねえ、今から

じゃ食事の用意はできないですけど・・・。」と、近くの食堂に案内され、結局私一人での夕食となった。今日は3人だけの泊まりらしい。

女将さんが横にぺたんと座って、給仕をしながら世間話をしてくれた。7年前に主人を亡くされたこと、その後は、女手ひとつでなんとか子供二人を育て上げ、この旅館を切り盛りして来たこと。娘さんは既に嫁ぎ、息子さんはこの家から勤めに出かけている、云々。お子さんの歳からすれば、女



将さんも私と同じ年代の方だろう。

「あなた、お子さんは？」

私たち夫婦には子供はない。

「じゃ、おさみしいでしょう？」

「・・・うぢじゃ、作らなかつたんです。二人で好き勝手に生きたかつたら。それに私は子供を育てる能力に欠けた人間ですから・・・。」

「子供は勝手に大きくなるものですよ。それに作らんとく方がたいへんでしょう？」

「・・・。」

返答に詰まっていると、先程の夫婦連れも帰って来る。コタツにあたりながら、4人でまた世間話に花が咲いた。

「このご夫婦は印刷屋を経営されているらしい。ある日、首の腫瘍で入院し、一旦退院したものの、再度入院を宣告された。すぐる思いで神仏に祈り、万が一にと他の病院で検査をしておしてみた。ところがなんと、この腫瘍がすっかり消えていた、と言う。不思議なこともあるものだ、と、そこでお礼の意味で、お四国参り

を思い立たれたとのこと。おそろく、腫瘍はガンでは、との思い込みもあつたのだろう、それだけに、地獄で仏に会われたような心境になられたのだと思う。

「この信心には程遠い人がでしょ、まあ、お遍路に行くから一緒に来い、なんて言われた日にゃ、ホント、びっくりでしたわ。」

「でもね、毎日がケンカですわ。慣れんお寺参りですよってに、助手席から右行け、左行けでっしやる・・・。」

「ケンカしてても、お互いお元氣だつたらいいじゃないですか。うちの旦那なんか、さつさと先に逝つてしまつて・・・。」

女将さんがちよつとしんみりとするので、

「いい男、また見つかりますから・・・。」

と私が慰めると、

「すぐ死ぬような男なら、もう要らない！」

女将さんは、ケラケラ笑いながら、私の膝をピシヤリ、とたたいた。

この宿の女将さんのように、早くご主人を亡くされても夫婦は夫婦。ケンカしながらでも夫婦は

夫婦。それにわが家のように、親になりきれなかつた夫婦だつている。いろんな夫婦が、自分たちだけの歴史を作つて行く。

さあ、わたしらもお風呂を使わしてもらいましょ、と奥さんの一言で、挨拶をして二階に上がった。ずらりと並ぶ部屋の奥に既に床がのべてあつた。窓の外にちよろちよろと川の流れる音がした。布団の中で眠りにつきながら、この宿で、こつこつと働いて来たご主人を、ふと自分に重ねてみた。選択できる未来は歳を追つてますます狭められてきた。集約する一点に向け、ただひたすら生きた彼の人生は、悔いのないものであつたと信じた。そして自分の人生もまた・・・。

11月9日 晴れ、朝は霧

5時起床。昨日の洗濯物を触つてみるとまるで乾いていない。女将さんが心配してドライヤーを貸してくれた。30分ほどで、辛うじて着られるほどに乾いた。しかしドライヤーは、なかなか便利

だ。必需品として、次回からは携帯することも検討すべきだろう。

6時半、ご夫婦と朝食。

お二人は7時には宿を出られた。私も後から出立する。女将さんが玄関まで見送りに来られた。外は霧がねっとり立ち込めている。10時ぐらいまでは冷え込

むから、と女将さんが気遣ってくれた。

「亡くなられたご主人の分も、道々お祈りして歩きますから。」

別れ際、そう言々と、彼女は一瞬真顔になり、それから吹っ切るように微笑でみせた。

岩屋寺から第四十六番浄瑠璃寺を目指すには、大宝寺までの引き返しコースとなる。昨日と同じコースでは味気無いので、今日は車道を久万町まで引き返すことにした。

れながら歩いた。

国道に出てから、長い上り坂を歩き、三坂峠からまた山道へ分岐した。延々と下る。

電話で予約をしていた

途中昼食を取ってから、舗装道に変わった道をさらに下った。2時頃、第四十六番浄瑠璃寺へ着いた。しっとりした静かなお寺だ。竹ボウキの掃

旅館は随分さびれた感じだった。風呂もなく、近くの温泉の入場券を渡された。夕食は隣接したスナックに用意されていた。部屋に戻ってから、床を延べてある横に腰高の



き跡が、まだきれいに残されている。ここから、たんぼ道を1キロも行くと、第四十七番八坂寺。さらに通行量の多い車道に出て、第四十八番西林寺へは4時過ぎに着いた。

障子があり、何気なく、かなりと開けたら、鏡張りになっていた。もしかして連れ込み宿も兼ねているのだろうか？何やらげっそりとして、早々に布団にもぐり込んだ。

この後、次の第四十九番浄土寺の門前までくたび